

S 氏邸訪問記(2023.9.17)

1. はじめに

オーディオ仲間の中でも最高のハイエンドユーザーである S 氏が構築されたオーディオルームについては、昨年訪問させていただき、[S 氏邸訪問記\(2023.9.21\)](#)で報告しました。その後、体調が芳しくなく遠出を控えていましたが、今回回復をまって再度訪問させていただきました。

2. S 氏邸のシステムの概要と試聴対象

今回試聴させていただいた S 氏邸のシステムは前回と大きくは変わっていませんが、修理や追加の調整がなされています。

スピーカー：TANNOY Autograph(Monitor Silver・オリジナルキャビネット)

プリアンプ：Marantz 7

パワーアンプ：Marantz 2×2

アナログプレイヤー：Thorens TD126ⅢBC Centennial

アーム：SME 3009

カートリッジ：Ortofon SPU-GE

ステップアップトランス：Ortofon T-3000

CD プレイヤー：PHILIPS LHH-1000

PHILIPS LHH-2000

*システムの写真は、前回の訪問記参照

以上の名機の特性を活かし、完成度の高さも考慮しながら、必要、かつ効果的と思われる箇所にリスニングルーム構築当初よりインフライズの助言を受けながら下記のような対策を施しているとのこと。

- ・スピーカーケーブルは、スピーカーリベラメンテで、音圧を避けるため、構築時に壁、天井の中を通してある。
- ・マランツ 7、マランツ 2、トーレンスのプレイヤー、LHH-2000 の接続は、相互の規格の整合をとりながらアナログリベラメンテを使用
- ・トーレンスのプレイヤーのマランツ 7 へのアースはアースアキュライザーを使用
- ・構築時に大地アースを採り、ここにマランツ 7、オルトフォンのトランスにアースアキュライザーで接続

今回は、以上のチューニングも含めた成果を、S 氏が最近、調べておられる同じマスターからの盤を種々聴かせていただきました。

また、76cm サブウーファー付きの別システムでオルガン曲を聴かせていただきました。

た。

スピーカー：TANNOY Westminster

プリアンプ：McIntosh MC-30

パワーアンプ：MC-7300

サブウーファー：Electro Voice EV 30W

ローパスフィルター：ウエスギ特注（カットオフ：60Hz）

パワーアンプ：アキュフェーズ P300X

スーパーツイーター：Dinaudio（ウエスギ仕様）

プリアンプ：ウエスギ UBROS-8

パワーアンプ：ウエスギ UBROS-25

CD プレイヤー：Mckintosh MCD-7007

FM チューナー：SEQUELLA Model 1

Mckintosh MR703



なお、LHH-2000 や LHH-1000 もさらなる改善の余地がないかということで、アースアキュライザーEA-1 と仮想アース Crstal Ep とバランスアナログアキュライザーBACU-2000 を持参しました。

3. S 氏邸のシステムの試聴経過

最初はバッハの管弦楽組曲 2 番で下記の希少盤です。初めて聴くもので、モノラル盤ながら染み渡るような演奏で、責任者のサイン入りの超貴重盤です。演奏はどう訳していいかわからないので、写真を添付しますが、現在も続いているドイツのアンسバッハで開催されるバッハ音楽週間での演奏だそうです。

<https://m-festival.biz/introduce/bachwoche-ansbach>

<https://www.bachwocheansbach.de/>

ARCHIVE 14 614APM (ARC3114)

*Solistenvereinigung der Bachwoche Ansbach
Conductor: Fritz Rieger*

次が、カール・ズスケ率いるベルリン弦楽カルテットのベートーヴェンの弦楽四重奏曲ラズモフスキーで国内プレス盤とドイツプレス盤で聴かせていただきました。メタル原盤のプレス違いだそうですが、前者がやや強調感があるのに対し、後者がより自然な音になっています。素材の塩化ビニル・酢酸ビニルコポリマーや添加物の材質やプレス条件などが音質に影響している可能性も考えられます。

ETERNA ET-3026-27

ETERNA 825 996-997

次は、オットマール・ズイトナー指揮シュターツカペレ・ベルリンのベートーヴェンの交響曲 3 番英雄で、シュターツカペレ・ベルリンの実力が分かる正統派のベートーヴェンの演奏です。

ETERNA ET 827 489

引き続きモーツアルトのピアノソナタ K330 で、演奏は初めて聴く Gelhard Pchelt でモノラルながら立体感があり、優雅な演奏です。

ETERNA 820 018

バッハのヴァイオリン協奏曲 BWV1041 は、これも初めて聴く Roman Totenberg のヴァイオリンとスタニスラフ・ウイスロスキ指揮ワルシャワ国立フィルハーモニー交響楽団の演奏では、モノラルながら立体感もあり染み入るような演奏です。

ETERNA 720 083

最後は、マーラーの交響曲 1 番巨人でシュターツカペレ・ドレスデンの演奏で、派手さはないものの重厚な演奏です。

Deutsche Shallplatten 729 119

オーディオの試聴会やマニアの集まりでは、とかく演奏内容は二の次で、聴き映えのする音源が選択されますが、今回は、まずバッハやモーツアルトやベートーヴェンやマーラーの曲があって、それがどのように解釈され、演奏されているかが分かる音源の選別が主眼であり、それを活かす機器のポテンシャルやチューニングがどうなっているかまでというアプローチが理解できました。

TANNOY Westminster のシステムでは 1959 年録音のヘルムート・ヴァルヒャのバッハのオルガン曲集の CD と、持参した、同じシュニットガーのオルガンで演奏した 2017 年録音の塚谷水無子のバッハのオルガン曲集の CD を聴かせていただきましたが、76cm サブウーファーの威力を知るとともに、それによるアナログマスターとデジタルマスターの重低音の録音の違いも知ることができました。

最後にメインシステムに戻って、CD を聴かせていただこうとしましたが、LHH-2000 は少し不調とのことで LHH-1000 に変更し、次のような手順の試聴を行いました。

- 1) 当初のアンバランスアウトでの再生
- 2) バランスアウトにしアンバランスへの変換での再生
- 3) バランスアウトケーブルの前にバランスアナログアキュライザー挿入で再生

4) LHH-1000 の突起部にアースアキュライザーで仮想アースの Crystal Ep 接続音源は、ヘルムート・ヴァルヒャのバッハのオルガン曲集の CD でしたが、バランスアウトで静寂感が増し、1)→2)→3) の順に音像が明瞭になり、低音の明瞭度が上がりました。4)はもともとアース端子がないところへ無理に加えたものであり、若干音がクリアーになる程度でした。

最後に、演奏会で聴いてきた、トリオ・ヴァンダラーのベートーヴェンのピアノ 3 重奏曲の持参した CD を聴かせていただきましたが、ヴァイオリンの倍音、チェロの胴鳴り、ピアノの響きなど、演奏会の印象が蘇ってきました。

4. まとめ

ハイエンドのヴィンテージシステムの見本みたいシステム構成に種々チューニングを加えられた成果を堪能させていただきました。音源としては、S 氏が丹念に収集された、ARCHIVE、ETERNA、Deutsche Shallplatten の希少盤を含む名盤の数々で未知の演奏家やシュターツカペレ・ドレスデンやシュターツカペレ・ベルリンの優れた演奏を知ることができ、名機で名盤を聴く体験をさせていただきました。

以上